
零崎殺識の人間関係

佳織

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎殺識の人間関係

【Nコード】

N2687X

【作者名】

佳織

【あらすじ】

僕の名は零崎殺識。表での名前は秋冬皐・しゅんとう さつき。僕の妹は零崎楽織。表での名前は春夏希良々・しゅんか きらら。僕達殺人鬼が迎えるのは、所詮終わりの無い終わりだった。仮想人間シリーズ第1弾。

さつきらシリーズ（前書き）

あっはー、DRRRと化物語をどう繋げるかが問題だ。

さつきらシリーズ

0章 人物紹介

主人公：零崎殺識ぜろさきころしき

本名：春夏秋冬殺鬼ひつとせきつき

表世界での名：秋冬皐しゅうふくこう

二つ名：昏迷僭主 - カレイドスコープデイスペアー -

人形煉獄 - ナパームフェイク -

年齢：19

身長：170cm 体重 53kg

武器：斧 絞殺幻想 - ミラージュスファイア -

人識と同じく生まれついての血統書付きの殺人気。

殺鬼と付けられたのはその所為で、案外この名も気に入っているらしい。

一日の平均殺人数、10。（自分から襲った場合。）

襲われた場合には限界が無い。

得意な事は人殺しだけではなく、たまに喜楽の遊びや訓練に付き合う。

殺し方は主に首を落とす方法。

ちなみに喜楽は殺喜に全てにおいて勝てた事が無い。

戯言遣いとは友人通り越して大親友。

ただあの軋識が従っていたという友が恐ろしく怖いらしい。

ヒロイン

主人公：零崎楽織ぜろきらくおり

本名：春夏秋冬喜楽ひとしせきら

表世界での名：春夏希良々（しゅんかきらら）

二つ名：墮落幻影・カレイドスコープアイズ・

二重解体・ダブルブレイカー・

年齢：15

身長 153cm 体重 37kg

武器：チェーンソー 微小童話・プラズマビリーバー・

（銃 傀儡公主 - スパイラルイミテーション - ）

金髪三つ編みポニーテールが特徴。

というかポニーテールを三つ編みで括つてある。

美少女で気が強く人を守る優しい子。

それ故に人殺しは好まないが、零崎は人の段階を超して愛している為、

零崎を傷付ける者は容赦なくチェーンソーを振るう。

一番体力が無く、腹筋回数30秒最大16回、握力15。

筋力も余り無い為、チェーンソーは軽い物を選んでいる。

時折銃に変わる。

軋識にビリーとかカレーとかブルブとか呼ばれる事だけが悩み。

ルイカラルと呼んでもらっているが、喧嘩した場合ビリーになる。

零崎を侮辱されたり過去の話を持ち出されると凄い事になる。

関織よりではないが一人でアパートを粉々に出来るほどになる。

さつきらシリーズ（後書き）

（ ） ・ ・ （ ） ショボーン

1章 終わってから始まり始まりで終わる。(前書き)

つまりは最初で最後っつー事だ。ジンセーは。

1章 終わってから始まり始まりで終わる。

春夏秋冬殺鬼は普通に人生を送っている。

だがその名前が故に学生時代は意味も無く侮蔑され、

妹の喜楽も意味も無く侮蔑されていた。

いや、喜楽に関しては男子からは侮蔑、女子からは嫉妬を受けていた。

それは劣る物無いほどの美形だったからだ。

（殺鬼も美形だが名前の所為で乙女心より恐怖心が芽生えたらしい。）

現在殺鬼は大学生を中退した。

1週間の大学ライフだった。

「もーっ！！にーちゃん何で中退しちゃうのっ！？

せっかくのいーサンがいる学校でそー！？

関織ちゃんも中退したしさあー。」

喜楽は机に突っ伏した状態で顔をだし、手足をばたばたして嘆いた。

「その、「兄さん」みたいにいーを呼ぶのはやめろ。喜楽」

「ほえ？零崎以外の人に兄ちゃん的なコト呼んじゃ駄目なのっ？

ッはアっ！！！！！

嫉妬すか！！嫉妬ですね！？お兄様！！！！

分かりますたー！！了解でっさー！！

「落ち着け。そういう意味じゃない。発音の問題ってのが（ry」

「そーいうことーん！！了承リヨウシヨー！

はっおーん！！出発おーん！！

なははー！！

さらに激しく手足をばたつかせる。

「エンジン停止。」

殺鬼は常備しているハリセン（喜楽用）で喜楽を叩いた。

もちろん手加減はしている。

ヒュンッ！！だなんて音はせず、

ぱすん。と喜楽の頭にハリセンが乗った。

「ほえ（ぱすん）・・・あ、えっと、

あつ、痛ッ！！」

喜樂はそれほど痛くないハリセンを頭で受けた。

「反応遅いよ。

それからテンション下げて。」

「了解！！

【きらのテンションがもとにもどった！】

よし。で、兄ちゃんまた大学入る気い無いの？」

喜樂は首を傾げる。

「多分戻るよ。まだ理数系はしたいし。」

殺鬼は喜樂の机にあった椅子に座り、頬杖をつく。

「ふうん、なら良かった。

いーさんは兄ちゃんが居た時すごい楽しそうだよ。」

ほわわんとした雰囲気で喜樂は笑う。

「・・・だといいけどね。」

その時。

ぴんぽーん

「えーと、喜樂ちゃん？」

戲言遣いが戸を開ける。

喜樂は飛ぶように席を立つ。

バターン！と椅子がぶっ飛んだ。

「k t k r ! ! ! ! !

ほら来たっ！！噂アすればかもよっ」

「あ、やっぱり喜樂ちゃんだっただ」

「ほえ、何が」

「さっきからくしゃみが止まらなくてね、

喜樂ちゃんの仕業か」

「あっはー！！！！！！

ふっ、あっは、聞いた!?

くしゃみの発信源で此処まで来たんだよ!?

テレビで放送すべきだ!!

きつとこれは電話の次に有効な(r y

ともかく上がって上がって!!

もー私のてんそんはとっくの間に上がってるよっ!

A G E A G E だよ!!」

「悪い。こんな妹で」

「あ、いや。

気にしないでくれ、いつもの事だろ」

「そうだな」

「セツナイorz」

- 閑話休題 -

「・・・っていう話を先程してたんだ。」

「うん、絶対相性良いよね、二人！」

「嘘だ」

「ホントだよー！嘘じゃないよー！」

だって兄ちゃんといーさんすごい口調似てるし、

趣味だって合うし、

それから、えーと……。」

喜楽は言葉につまり人差し指を口の下に当て瞳を上へずらした。

考えるポーズだ。

「えーと……」

今度は「考える人」のポーズをとりだす喜楽。

「もういいよ、喜楽ちゃん。」

喜楽の頭にいーちゃんは手を置く。

撫でているのではない。此处重要。

「・・・むう。」

ホントに似てるんだけどなあ・・・。」

「ていうか、喜楽ちゃんが高校に通ってるっていう噂聞いて此処きたんだけど。」

「あり、くしゃみじゃないの？」

「？さあ、忘れた。」

「うわ、忘れっぽいね。」

まあどーでもいいーや。

うん、通ってるよ。

来良学園。中々いい高校だよ」

「いや、でも喜楽ちゃん殺人鬼でしょ、

ろくに変装もしないし警察来たら一発で終わるよ」

「そのときは学校ごと破壊するからだいじょぶい」

「そついう問題？」

「あ、そうか、周りにパトカー集まってるかあ、

「だったら地域ごと壊しちゃう」

「それは無理つてもんだよ!！」

「なははー、やってみなきゃわかんないぜ？」

「つーより私ガツコに3年くらいいたら警察の人も気付くだろうけど、

今私は高3設定だから大丈夫!！」

2章 1ヶ月前（前書き）

らいらがくえん。

2章 1ヶ月前

それは1ヶ月前に遡る。

「・・・喜樂？」

「・・・えへへ」

「今なにをしているのかな？」

「べ、べんきょー」

「喜樂、お前ちよつと勉教しすぎじゃないか？」

「・・・何ゆえ？」

「これ、考え方が高3だぞ」

「・・・んー」

「ともかく・・・、お前今中3なんだから、中3の勉強をしろ。」

「？」

中3が高3の勉教しちや駄目なの？」

「駄目ってワケじゃねーよ。ただ・・・。」

「ただ？」

「・・・」

まあいいか、喜樂。

お前は高校に入れ。」

「・・・はい？話が分からぬ。」

おや？きらのようすが・・・。

「来良学園 だよ。知ってるか？」

「・・・殺鬼兄ちゃん、

こないだ私を澄百合学園に入学させようとしたでしょ、
今でも覚えてるよ。忘れたなんて言わせないよ。

それに殺人鬼から殺人を教わってる春夏秋冬喜樂だ。

・
・
・
・
・
・

どうせ普通じゃない学校なんですよ。」

「・・・普通だよ。

勉強目的で行くんだ。」

「・・・ふー・・・ん？」

まだ怪しげな顔になって、

そして5秒後、何も無かったかのようにけろっと喜樂は言った。

「まあ怪しい学校だったら私その学校ごと壊滅させるからだいじよぶ」

「お前人殺しは好まないキャラじゃねーかよ」

「・・・おや、人識お兄ちゃんではござらんか」

「かははっ、何だよござらんかって」

「ふほうしんにゅーいくない・・・」

「って、人識兄ちゃんの家賊だったや。」

「おう、楽織、殺識。」

「・・・人識さん、今日は」

「同じ同じ歳だろ、さん付けすんな」

「あ、すいません。」

人識、今日は」

「ほんとに言いやがった」

「？」

「さっきまで私達高校の話してたんだよー、」

私が高校に行くとか云々。」

「へー、」

「嫌だけどね」

「え」

「・・・兄さん？
零崎殺識兄さん？

何でそんな動揺してんのかなあ？？

んー？言ってみてー？

何かなー？」

「あ・・・、いや、

制服、もう注文して届いてるんだよね。

入学届けも出したし」

「・・・。」

行くことになりました。

2章 1ヶ月前（後書き）

3章 高校転校（前書き）

注意です。よく読んでください。

阿良々木ハーレムの皆様は新潟に住んでるはずですが、

池袋に住んでる設定です。

覚えとけよ！（ジャイアン）

3章 高校転校

「始めまして！

春夏希良々です！よろしくお願いしまーっす！

ええと、京都から越して来たので全然池袋の知識ないでーっす！

ハブにしたらおこっぞー！なははーっ！」

「ヒューヒュー！……！」

「なははっ、この学校たのしそーだなー！……！」

「えー、では、次、秋冬。」

「……秋冬皐です、よろしくお願いします。」

あ、ども、喜楽です。

私の名前の由来をお教えしましょう。

「お前行き成り自己紹介してる時に裏舞台に出てきたと思ったら何自分の名前の由来解説しようとしてんだよこのキチガイ外道」

とか思ってる人が居たらしいません。

えー、皆さん、「ひととせ」って漢字で打ってみてください。

「一年」って出ませんか？

はい、私の名前は喜怒哀楽からとってます。

良い意味のをとってます。

あれっすね、私は極めて良い名前なんすよ。

一年間ずっと笑ったり楽しんだりするっていうそんな意味です。

さて、兄ちゃん。

兄ちゃんは別です。悪い意味なんです。

一年殺鬼。

一年間ずっと殺人鬼ってわけです。

まあこんな感じで私達の名前が出来てるわけです。

厨2とか言ったら画面から私が飛び出てきますよ。多分。

うん、ええ。

-
-
-
-
-

閑話休題

「兄よ」

苺マーガリンパンを持ちながら兄の耳元で囁く喜樂。

「何だ・・・楽織」

一方焼きそばパンを持ちながら常音で話す殺鬼。

「何でパンって人気なんだろうね」

こそつ と喋る喜樂に殺鬼は

「知らねえよ」

と返した。

「苺ってさあ、甘くないよね」

「甘酸っぱいとも言いたいのか」

「辛い」

「お前の味覚が不安だよ」

「渋い」

「じゃあ食つなよ!」

「マーガリン美味しいもん！」

「マーガリンパンの選択は無かったのかよ！」

「味気ないし！」

「じゃあお前何でそれ選んだんだよ！」

「・・・いや、何だかんだ甘ったるいキャラを作ろうかと」

口にパンを押し込む喜樂。

「キャラの為なら苦勞は惜しまないのかお前は」

とんでもない奴だった。

というか毎日食うのかよ。

「てかさあ、全然池袋の情報知らないんだけど。

なんかそれっぽいや人居ないの？

こう・・・なんか

Mr池袋って人」

「僕に言っな」

「京都の事なら何でも知ってるんだけどなあ」

「あー」と大口を開けまたパンを頬張る喜樂。

整った顔立ちは決して変わらないが（むしろ可愛い）

女らしさの微塵もなくその苺マーガリンパンを食べる意味が皆無だった。

僕も焼きそばパンを一口食べる。

美味しかった。

「・・・いー、元気かな」

「？」

人差し指で口に付いた苺ジャムを取っている喜樂。

「元気だつて。いーさんの事だ。」

死にかけても元気だつて」

にい と笑う喜樂。

「・・・付いてる」

僕はウェットティッシュで口を拭ってやる。

「つつつていうかさあ、何で高校なんか通うことになったの？」

「ああ、喜樂にはまだ話してなかったか。」

3章 高校転校（後書き）

零崎シリーズ書くの面白いですw

4章 回想（前書き）

潤さんとの会話。

4章 回想

しょ「はいこれでジャッジメント。」

「うわ」

オセロを裏返す殺鬼。

白色で埋まっていた。

「何事にも白は勝つんだよ。」

いー、白でやってみなよ」

「そういう問題なのかよ・・・。」

随分とチートだな。

て、喜楽ちゃんは？」

「ああ、県外まで行って零崎しに行ってる。」

京都で零崎控えろって人識兄が言われたそうだから。」

「そこまでしてかよ」

・・・ん？

赤色の気配。

二人同時に振り向いた。

「さーっつきちゃーん！」

赤い声。

でも「あの」声だった。

「・・・。」

はーあーいー！」

「笑うなぼく頑張れぼく」

いーが横を向きながら譚言の様に呟く。

いや。戯言か。

アパートから駆け下りる。

「どうしたんです潤さん」

「いやさあ、殺鬼ちゃんの妹ちゃん。

喜樂ちゃんの事なんだけど」

「はい？」

「さっき被魔師に捕まってた」

「はいいい！？」

「すげえ反応。

まあそれは何とかなったんだけどよ。

あたしが助けたから」

「！！」

な、え、喜樂が迷惑かけて・・・！」

「いやいやいやいや、

対して凄いことしてねえぜ？

警察みてえな奴から腕引いて暴れまくっただけだから。

人識君と蘭識君も居たぜ。」

「つつ、いえ！！何かお礼をしないと……」

「あー……じゃあひとつ頼んでいいか？」

「はい、僕に出来ることなら何でも！」

「なんか奴隷みてえだな。

えつとな……、来良学園って高校に喜樂ちゃんを入学させてほしい。

できれば殺鬼君も。」

「いや、でも僕もう大学生ですし」

「情報屋の折原臨也って奴にこれ渡してほしいんだ。」

……SDカード？

「ちなみに見るなよ？」

見たら爆発するぜ」

「そういう系の仕組みですか……。」

「玖渚ちゃんなら知ってると思うぜ。」

「うにー、いざちゃんはある僕様ちゃん好きじゃないよ」

「って言うてたし。」

「う……玖渚さんですか」

「論……ってか関織が居なくなってから結構暇してっからなあ。」

会いにいつてやれよ、暇だったら。」

「ああ……今はまだ一次試験くらいでしょうかね。」

「いいハンターになればいいけどよ……。」

ま、話戻すけど、

制服は偶然偶然女子用男子用二つあるんだ。

あと偽造学生証と偽造身分証明証。」

「ああ、何から何までありがとうございます。」

「いや、頼んだのあたしだからな。」

「ていうか僕は大学生で高校生に見えないですし喜楽は中学生で高校生に見えないですよ……？」

中学生は中学生でも身長が小さいですから……。」

「まあ大丈夫だつて。」

ちなみに池袋だから。」

「池袋……？京都にそんな所は」

「東京だつての」

「！？」

4章 回想（後書き）

5章（前書き）

「あの」3人と絡みます。

5章

「牛乳うまい」

喜楽が屋上のフェンスを越した縁に座り足を投げ出す。

要するに危ない場所に座っている。

それも牛乳とポケコン（友と論で解りやすく改造した）を持っている為かなり危険だ。

「コーヒー牛乳うまい」

殺鬼も同じ行動に出た。右手にI p h o n eで左手にコーヒー牛乳。

「てかさあ何でコーヒー牛乳？かつこつけ？」

「お前は何で牛乳なんだよ。」

「教室でもうキャラは見せたからね。子供らしい一面を見せてもいいかと。」

「お前にとって苺マーガリンパンは大人らしい食べ物かよ」

「JKらしい食べ物つすよ、もう放課後だけだね。」

えへへ と笑う喜楽。

「で、どうよ、情報屋さんの情報分かった？」

覗き込むと

「さつき」というチャット名があった。

「・・・兄よ、そりゃ幾らなんでもネーミングセンスなさすぎだろ。」

さつき って言い辛いし無理やりだよ」

「お前何にしたんだよ。」

「きどあいらく。」

「き」は「喜ぶ」「で」「ど」は「努力」。

「あい」「は」「愛する」「で」「らく」はそのまま「楽」。

喜努愛楽。」

「とても殺人鬼とは思えないな・・・。」

「えへ」

「殺人鬼？」

「「！？」」

「？」

どうしたの紀田君虫でも見つけたの？」

「お前これは二人に失礼だぞ。」

二人とも顔真つ青だし傷ついたんじゃないかねえの？

まあそういう時の為に俺は最高の（ry」

こっからは小声タイム。

「兄ちゃん、バレたよ」

「いや落ち着け。上手いこと失神させて記憶を消すんだ」

「兄ちゃん器用だもんね」

「お前がさせんだよ」

「だが断る」

「無理に決まってるだろ僕にそんな事」

「じゃあそんな事思いつくな」

「喜樂のくせに普通の事言いやがって」

「何それ私が異常者みたいじゃんか。」

殺せばいいんじゃない？」

「やめろ、学校は荒らすな」

・
・
・
・
・

「・・・っていう考えなんだけどどう！！؟؟春夏秋冬従兄妹！」

「はうつ！？」

「うわあ可愛い」

「ごめん聞いてなかった」

「日本の古都の京都から来た大和撫子日本男児に！！」

このナウなヤングが集まる夜の街池袋を！

紹介しようじゃないか！」

「「へえ」」

「何その薄い反応」

「ウ、ウワー！！ウレシイナー！

ナア！！キララ！」

「だねだねさつきこれいじょうにうれしいことはないよやばいちょううれしいよしんぞうがばくばくだよときめきだよきらめきだよすばらしいよ」

「うん満足！」

「・・・これで満足なんだ」

「惨めだね」

後ろの黒髪の男の人が言う。

結構ひどい。

「でもいいよねそれ」

「ああ、確かにその人探すのに丁度いい。」

「人探し？」

「ああ、実は私達人を探しに来たんです。」

「うわぁいいねえいいねえ運命の人を探しに従兄妹二人で京都から遙々池袋まで……。」

「折原臨也さんって人だよ」

「「「………」」」

「？」

「どうかしたのか？」

「いや、その折原臨也って……」

「？」

「いや、まあすぐ会えるよ。」

「まずは平和島静雄って人に会えればいいから。うん。」

「あ、案内して……」

「ああああああああああああああああああ俺等用事あ

るんだっ た!!じゃあな!!

アッデュー!!

「・・・」

「・・・」

5章（後書き）

なんか無理やりです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2687x/>

零崎殺識の人間関係

2012年1月5日20時49分発行